

宝林宝樹 (5)

ある夏の暑い日のこと、お米作りをしているご門徒さんの家にお参りに行きますとそのおじいさんが汗を滝のように流しながら帰ってこられました。私が「暑いのに大変ですわね」と声をかけますと「院主さんな、わし、あと何回米作れると思うか」と尋ねられたのです。突然の問いに戸惑いながらも「まだ十年は大丈夫でしょう」と答えると、「そうやなあ。わしの年を考えたたらあと十年できたらええ方やろう」ということは多くてもあと十回しか米を作ることができんということやろ。そう考えたらなあ、苦じゃないんで。むしろ愛おしいんで」と仰いました。

私たちは人生の終わり、死というものをあまり考えたがりません。「死ぬことを考えたたらバカらしく生きていけない」という人もいます。しかしそうではなかったのです。このおじいさんは死ぬことを真面目から受け止められ、暑い日の農作業であっても「愛おしい」と喜びを口にされました。これが最後になるかもしれないと知った者は苦しみの中でも喜びを見出すことができるのです。暑い暑いと愚痴ばかりの私は恥ずかしくなると同時に、ありがたいことを教えていただいたと手を合わせたのでした。



宝林宝樹 (5)

ある夏の暑い日のこと、お米作りをしているご門徒さんの家にお参りに行きますとそのおじいさんが汗を滝のように流しながら帰ってこられました。私が「暑いのに大変ですわね」と声をかけますと「院主さんな、わし、あと何回米作れると思うか」と尋ねられたのです。突然の問いに戸惑いながらも「まだ十年は大丈夫でしょう」と答えると、「そうやなあ。わしの年を考えたたらあと十年できたらええ方やろう」ということは多くてもあと十回しか米を作ることができんということやろ。そう考えたらなあ、苦じゃないんで。むしろ愛おしいんで」と仰いました。

私たちは人生の終わり、死というものをあまり考えたがりません。「死ぬことを考えたたらバカらしく生きていけない」という人もいます。しかしそうではなかったのです。このおじいさんは死ぬことを真面目から受け止められ、暑い日の農作業であっても「愛おしい」と喜びを口にされました。これが最後になるかもしれないと知った者は苦しみの中でも喜びを見出すことができるのです。暑い暑いと愚痴ばかりの私は恥ずかしくなると同時に、ありがたいことを教えていただいたと手を合わせたのでした。

